平成30年度

非核平和広島派遣事業

—（ 感 想 文 ）—

愛　　西　　市

原爆ドーム前

平成３０年８月５日（日）～６日（月）

生　徒	(佐屋中学校) 大村　貫斗　　石原　天　　佐藤　萌恵　　和田　恵声 (永和中学校) 本間　玖瑠　　毎田　光輝　　村井　琉々華　　本間　瑚桃 (立田中学校) 尾崎　恒介　　安田　蒼明　　伊藤　千晴　　伊藤　優那 (八開中学校) 鈴木　仁　　安田　響基　　佐保　涼莉　　水谷　世蓮 (佐織中学校) 佐藤　真瞳　　加藤　愛斗　　森　己乃佳　　馬場　南帆 (佐織西中学校) 安達　輝　　永石　大和　　圍　楓乃　　桂川　花菜
引率者	古田　慎也　（永和中学校）　伊藤　菜浪　（立田中学校） 鈴木　萌子　（佐織中学校）　池田　陽樹　（佐織西中学校）

（敬称略・順不同）

「広島派遣事業」

佐屋中学校　大村　貫斗

僕は広島派遣事業で広島の原爆死没者慰霊式と平和祈念式に行き、改めて原爆とその後の放射線によることの恐ろしさを知りました。広島に落ちた原爆による死者は１４万人におよび、爆発した後の温度は百万度にも達してその後も３千～４千にも及んだと知りました。火の近くにいるだけでも熱いと感じるのに、そんな温度を浴びたらとても考えられないほどひどいことになると思いました。原爆では、熱さによるものだけでなく爆風により吹き飛び、原爆ドームも鉄の柱がむき出しになり、原爆の恐ろしさはとてもひどいと思いました。その後の放射線による恐ろしさが一番ひどいと僕は思いました。東日本大震災の時も、原子力発電による放射線があったがそれが比にならないぐらいの放射線の量だったらしいです。その恐ろしさは全身の毛は抜けて黒い雨が降り、怪我が無いのに死んでいく人たちはほとんどが放射線の効果だと言われています。

これだけ恐ろしい核兵器を無くす運動が日本を中心にして行っているのだが、ロシアは７千個、アメリカは６千８百個を保有しています。日本は核兵器を保有していないが、アメリカと核兵器禁止条約を結んでいないので、被爆者の方はとても悲しんでいることを教えてもらいました。

日本は一番最初に原爆を落とされた国であり、１９４５年８月９日にも落とされてから、もう落とされた国はありません。今、被爆者の方が段々無くなっている中、このような事が起きたことを忘れてはいけないのです。僕たちがこれからずっと後世に伝えていかなければならないと思いました。そして、平和祈念式典にはとても多くの外国人の方たちがいて、少しでも興味を持っていてくれたことに僕は感激しました。

「原爆の恐ろしさ」

佐屋中学校　石原　天

私は、８月５日、６日の２日間、広島に行ってきた。そこで、私は沢山の出来事を学んだ。その中で、私が一番みなさんに伝えたいことは、原爆の被害の影響だ。

私は実際に原爆の資料館に行ってきた。見苦しいものばかりで見たくはなかったが、人生経験として良いものだった。熱線や紫外線の影響で体にやけどを負ったり、今もなお、原爆の影響に苦しんでいる人がいる。そこで私はもっと詳しく知りたいと思った時、テレビで１人の男性が被害について語っていた。「他のことに気を遣えない。この状況下では、今を生きることで精いっぱいだ。」私はこの人が言っていることについて正しいと思った。

みなさんは水がない、目の前で焼け地となった町、亡くなられた人々を見て、他人に気を遣うことができるだろうか。正直、私はできない。だから私たちが原爆の恐ろしさを実際に目の前で見た人に聞き、学んだことを次世代に伝えていかなければならない。私たちが日本で生まれたからには一度でもよいので、是非広島に行ってほしい。私が一方的にこうだった、と言っても分からないことも多いと思う。だから、実際に行って、見て思った自分の考えを大切にしてほしい。

「平和を守るためには」

佐屋中学校　佐藤　萌恵

１９４５年８月６日の広島。空は良く晴れ渡り、またいつもと同じ一日が始まろうとしていました。しかし、突然、その時はやってきたのです。

午前８時１５分、目もくらむ一瞬の閃光。摂氏百万度を超える火の玉からの強烈な放射線と猛烈な爆風で、広島の街は吹き飛びました。原子爆弾が、投下されたのです。

「戦争を、二度と繰り返してはいけない。」私は戦争の恐ろしさを分かっているつもりでしたが、実際に広島へ足を運んでみて、自分の認識の甘さに気付きました。どの資料を見ても、戦争や原子爆弾が人々にもたらした深い傷を感じずにはいられませんでした。

「国にとっては何十万人の内の一人にすぎないのでしょうが、私たち家族にとって父は全てだったのです。」

これは、父親を戦争によって亡くした女性の言葉です。この女性の父親のように、何の罪もない多くの人々が戦争に巻き込まれて命を落としました。そして、その人々には、私たちと同じように、大切な家族がいました。いとも簡単に大切な人の命が奪われる、その耐え難い悲しみを、戦争は人々に与え続けたのです。

今、世界では核兵器廃絶への取り組みが進む一方でアメリカやロシアなど９か国が１万４千９百５発もの核弾頭を保有しているのが現状です。この平和な日常を守り続けていくためには、世界で唯一の被爆国に住む私たちが、核兵器の惨禍についてを世界に発信していくことが大切だと思います。

そして、そのためには私たち一人一人が過去の戦争や被爆者の体験などについて、正しい知識を身に付けていくことが必要不可欠であると、私は考えています。

「青い空が続くように」

佐屋中学校　和田　恵声

「助けて。」

「死にたくない。」

１９４５年８月６日、彼らはそれすら言葉にできず、命を奪われたのだろうか。

名前の分からない。引き取り先がいない。約七万もの命。そこに生きていた確かな形を残したかのような人の形をした影。７３年が経った今、戦争を知らない私にでも、原爆の恐ろしさが分かった。

私は今回、広島派遣で目標地点とされていた相生橋、原爆ドームなどの沢山のものを直に見てきた。その中で強く心に残るものがあった。

記念資料館で見たものだった。円の形の部屋、壁一面に原爆投下後の光景が広がっていた。３６０度どこを見渡しても、がれきの山だらけ。まるで、私自身が今その場所に足を踏み入れたように感じた。だからこそ体験できた、恐怖に血の気が引き、生きている実感が無くなる気持ち。

そして、もう１つ。原爆投下の場所からわずか数百メートルの小学校だ。当時そこには疎開をしなかった生徒たちと先生がいた。彼らもまた、強い光を浴び、亡くなっていった。

小学校で唯一、２人のみ生き残った。しかし、そのうち一人もまた、放射線による病気で他界した。たった一人、残された一人。

生き残れたのに、辛い。そんな残酷な情景を想像するだけでも胸が締め付けられる思いだ。

当たり前だが、戦争はあってはならない。しかし、人間は憎しみを感じ、行動に起こすことのできる動物である。だからこそ、この日広島で起きたことを忘れず、平和とは何かを常に考え、戦争の起きない世界になるよう、お互い助け合える環境を整えるなどの小さなことから活動していきたいと思った。

この青い空が永遠に続くように、私は、この派遣を意味あるものにしたい。

「僕が見たヒロシマ」

永和中学校　本間　玖瑠

戦後７３年。２０１８年の今でも戦没者が多く出ていることを広島の平和祈念式典で知った。しかし、周りの戦争に対する意識は下がってきてしまっているのも事実だと思う。実際に、僕もこの派遣事業に参加していなかったら、戦争についてどこか他人事のように考えていたのかもしれない。本当に僕にとって、この広島派遣はとてもよい経験となった。

１９４５年８月６日午前８時１５分、広島の町の上空で原爆が投下された。原爆ドームや平和祈念資料館での展示品の数々を見たときに、戦争・原爆の恐ろしさを改めて感じた。資料館での展示品は生々しいものも多く、目を背けたくなるようなものもあった。しかし、それは戦争・原爆の事実を伝え、残虐性、悲惨さを物語っていた。たった一発の爆弾で、ほんの一瞬の時間でたくさんの人々の生活、命がなくなった原爆の威力を知った。罪のない多くの人々の命がこんなにも簡単に奪われてしまっていいものかと原爆に対して行き場のない強い憤りをもった。

平和祈念式典では、この２日間で一番平和を祈り、平和について考えさせられた時間だった。もう二度と、核兵器が使われないことを強く強く願った。

唯一の被爆国である日本。原爆による惨劇を一番知っているのは日本だ。だからこそ、世界に原爆の恐ろしさを伝えていく義務が私たちにはあると思う。

あの惨劇から７３年。今、広島はあの惨劇を微塵も感じさせないほどになっていた。そんな広島だからこそ、あの戦争を風化させないためにも、僕たちが実際に広島に行って、見て、肌で感じたことを中学生のみんなにもしっかり伝えていかなければならないと思った。

最後に平和記念公園に灯り続ける炎は、この世界から核兵器がなくなると消えるそうだ。そんな日が一刻も早く来ることを強く願いたい。

「No more ヒロシマ」

「平和ってすてきだね」

永和中学校　毎田　光輝

みなさんは一緒に笑い合っていた友だちが、自分の生まれ育った町が一瞬にして奪われたらどう思いますか。僕はとても苦しいです。でも広島や長崎では何気ない日常が奪われたのです。想像してみてください。もし自分の皮膚が熱線によってただれたらと。今まで感じたことのない恐怖に襲われると僕は思います。

広島の資料館には戦争の恐ろしさを伝える物がたくさんありました。僕が特に心を打たれたのは８月６日に原子爆弾に襲われた三輪車です。それは小さな子供が乗っていた物です。いつも通りの日に三輪車で遊んでいた子が突然とてつもなく熱い熱線に襲われて、もう二度と三輪車で遊べなくなったということを思うととても悲しい気持ちになりました。原子爆弾は関係ない人々まで襲った、とても無慈悲な兵器だと思いました。

僕は平和祈念式典に出席して、改めて平和って一体どういうもの何だろうと思いました。今までは友だちと笑い合っていたり、何気ない日常を送ったりすることが平和だと思っていました。しかし、それらは僕の身の回りだけで起こったことであって、世界では紛争が続いていて平和ではありませんでした。資料館で資料を見ていたときにふと思ったのは、平和って戦争がなくなるとかそういうものではなくて、世界の人々が、

「平和ってどういう意味だっけ？」

と、そう思えるようになったら、本当の平和が訪れるのだと思います。

「私たちができること」

永和中学校　村井　琉々華

１９４５年８月６日。いつもと変わらない１日を迎えようとしていました。午前８時１５分、広島の町に原子爆弾が落とされ、広島の日常が失われました。

原爆の強烈な熱線、爆風によって一瞬で真っ黒の墨のようになってしまった人々。顔の皮膚が焼け落ち、剥がれ落ちた両腕の皮膚を爪でつなぎとめてでも水を求めてさまよい歩いていた人々。川には死んでいるのか、生きているのかわからない人々で埋め尽くされていました。

爆心の真下を中心に半径２ｋｍの範囲の木造の家は全焼し、丈夫な建物も窓は吹き飛ばされ、内部は焼失しました。爆心地から１ｋｍで直接放射線を浴びた人々はほぼ亡くなってしまいました。体中、火傷の跡が盛り上がったケロイドになったり、髪の毛が抜けたり、歯茎から血が出たりなど、もがき苦しみながら亡くなっていった人も多くいました。直接放射線を浴びていなくても、いなくなった家族を探したり、被爆した人を看病したりすることで残留放射線を浴びた人は、５～１０年たった後、白血病や甲状腺がんを発病しました。７０年以上たった今でも、病気で苦しんでいる人々がたくさんいます。

なぜ何の罪もない人々が、こんなに苦しまないといけないのでしょうか。なぜ広島や長崎に原爆が落とされなければいけなかったのでしょうか。私は何の罪もない人を核兵器によって無差別爆撃することは、どんな理由があっても絶対にやってはいけないことだと思います。しかし、忘れてはいけないのが、日本はただの「被爆国」ではなく、他国への攻撃、侵略をしてきたということです。

広島には外国人観光客が多く訪れていました。きっとその人たちは、広島について、被爆国について、戦争について知ろうとしてくれたと思います。他国から見た日本は、どんな風に見えているのでしょう。決して、「悲惨な被爆国」だけではないはずです。日本人が悲惨な被害を訴えているだけでは、世界からの理解が得られないと私は思います。私たちは戦争という人間の大きな過ちを二度と繰り返さないために、日本が犯した事実を知り、戦争の悲惨さを伝えていくことが大切だと思います。そして、平和について個々がしっかり考え、命を大切にすることが平和への大きな力になると思います。

「戦争の恐ろしさ」

永和中学校　本間　瑚桃

原爆ドーム。被爆前の広島県産業奨励館の姿はどこにもありませんでした。現在の姿は戦争・原子爆弾の恐ろしさを物語っていました。原爆ドームの南東約１６０ｍの上空約６００ｍで炸裂した原子爆弾は、建物を大破・全焼し、中にいた人々はすぐに亡くなりました。そして、原爆ドームだけでなく、広島の町は一瞬にして、赤と黒だけの世界になったのです。資料館で見た錆びついた三輪車や爆風でぼろぼろになった衣類、８時１５分で止まった時計などはとても悲惨な物で、心痛む物でした。他にも展示してある人影の石や全身やけどで覆われた人の写真など、衝撃的な物ばかりでした。強烈な放射線と熱線、そして猛烈な爆風。私たちには想像もできない、摂氏１００万度を超える熱が小さな子供からお年寄りまでの数えきれないほど多くの命を奪いました。何の罪のない人の命が失われるのは本当に残酷で、もう二度とこんなに悲しい出来事は起こってほしくないです。

平和記念公園には、平和の鐘や原爆死没者慰霊碑があります。それらは池や噴水で囲まれています。それは、水を求めて亡くなった人が多く、これからは水に困らないでほしいという人々の願いが込められています。平和祈念式典でも広島市内の１７か所から水を集め、献水をしていました。被爆者にとって本当に水が大事で、求めていたものだと改めて確認させられ、また辛い思いをしていない私たちは水を無駄遣いしてはいけないなと強く思いました。

広島に原爆が落とされたあの日から、７３年が経ちました。今なお放射線で苦しめられている人がたくさんいます。平和への誓いでもあったように、私たちは７３年前の事実を、被爆者の思いを学んで、心に感じたことを伝えていかなければなりません。そして、核兵器や戦争のない平和な世界を創っていかなければならないのです。もう二度と、この悲劇が繰り返されないように・・・。

「核兵器廃絶」を世界へ

立田中学校　尾崎　恒介

一九四五年、八月六日、午前八時十五分。

それは、人類史上初核兵器が人間に対して使用された瞬間でした。広島は、ものの数秒で血と火の地へ変わり果て、命だけでなく人々の夢や思い出を奪っていきました。この字面だけではただの知識だけれど、原爆ドームを実際に見たとき、僕は唖然としました。建物の形は面影もなく、ただ自分たちを呆然と眺めているような気がします。自分は、原爆や広島について無知であったと原爆ドームを見て痛感しました。

平和記念資料館の展示物は、人々の苦しみや悲しみ、原爆の悲惨さや恐怖を訴え続けています。八時十五分で止まった時計。焼けた衣類。ケロイドになった人間。自分は異世界にいるのかと錯覚するくらい惨いものを目にして、心が痛くなった感覚を今でも鮮明に覚えています。

この無残で惨い歴史を再び繰り返すのでしょうか。この疑問の答えは全人類共通して「起こしてはならない。」と答えるでしょう。しかし、この「核兵器」を廃絶しない限り、戦争を繰り返される可能性はゼロになりません。「戦争に終止符を打たなければ、人類に終止符を打つことになる」とジョン・Ｆ・ケネディが話していました。核を放棄しない今、この事が現実味を帯びてきています。核を保有して戦争に備える事は間違っています。戦争で得るものはそう多くありません。むしろ失うものの方が多いです。戦争を起こさなくても解決する糸口は必ずあるはずです。

平和公園には平和の象徴の折鶴が日本にとどまらず世界中から届けられています。世界中が平和を望んでいるのです。核保有国でも平和を望んでいるはずです。広島を訪れた僕たちは「核兵器廃絶」を促す役割があります。なぜなら、被爆国であるため核の恐怖を一番よく理解しているからです。僕たちは、平和の為に努力することを誓います。

近い将来、平和の鐘が世界中に響き渡り「平和の灯火」が消える日が来ることを期待しています。

広島派遣に行って

立田中学校　安田　蒼明

僕は広島に行き、この土地で十四万人もの人が亡くなったという事実を、否が応にも受け止めることになりました。

初日に見学した原爆ドームでは、むき出しの鉄骨や、半分くずれたレンガなどが、むなしくこちらを見つめているように感じ、自分の存在はなにかと問いかけられているようでした。

平和記念資料館では、ものすごい熱で溶けたり、焼けたりした遺品に、その持ち主の無念さを想像して胸がしめつけられ、一歩一歩人類の歴史を踏みしめている気がしました。

また、僕がもともと興味のあった「どうして原爆が落とされたのか」「広島はどのようにして復興していったのか」などの資料が沢山あり、とても勉強になりました。

平和記念式典では広島・長崎の方はもちろん、日本全国、また、世界中から大勢の人々の強い思いを肌に感じました。非核化に向けて、一人一人が声を上げ、国と国が協力して実現していかなければならないと改めて思いました。

以前ジョン＝レノンの「イマジン」という歌を聞いた事があり、母が「戦争について歌っているんだよ」と言っていて、広島から帰ってきてからもう一度聞いてみました。「想像してごらん。みんなが今日のために生きているって…」や「国や宗教のために殺しあったり死ぬことはないよ。」などの歌詞に、本当にその通りだと改めて感動しました。

僕は、戦争によって生み出される苦しみや悲しみ、絶望感などを忘れず、未来に向けて平和な地球を想像することから始めてみようと思います。戦争は国と国が戦いますが、実際は人と人との戦いであるという教科書には載っていない事をこの広島派遣で学ぶことができました。

僕たちは将来、人と人が手をとり合って、協力しあう事の大切さを、行動で示せる人物になり、社会に貢献できるようになりたいです。

広島派遣事業に参加して

立田中学校　伊藤　千晴

　私は今回の派遣事業で初めて広島へ行き、初めて戦争の恐さを目の当たりにしました。広島に訪れる前に、私は原爆についての本を何冊か読んでいました。しかし、実際に自分の目で見てみると、想像をはるかに超えるような現実がありました。原爆ドーム、平和記念資料館にある原爆の被害を受けた方の写真、平和記念公園の原爆が残したたくさんの跡。これらを見ていくうちに何か心に重いものが残っていきました。

　また、平和祈念式典の平和への誓いで述べられていた言葉が心に強く残りました。

「平和とは、自然に笑顔になれること。

　平和とは、人も自分も幸せであること。

　平和とは、夢や希望をもてる未来があること。」

これを聞いて、「平和」を言葉に表すことは、こんなに簡単で単純なことなんだと思いました。しかし言葉にするのは簡単でも、実際に実行しようとなるとどうすれば良いか分からなくなってしまいます。

だから今、苦しみや憎しみを乗り越えて懸命に生きてきた広島の方々が、私たちに思い出すのも辛い記憶を、語り部として次世代に伝えようとしてくれています。私たちはそれを聞いて、受け止めて、次世代に伝えていくべきです。また、広島を訪れて実際に自分の目で戦争の恐さ、恐ろしさを実感する。これらのことを実行することによって、世界が平和というゴールに一歩ずつ近づいていくのだと思います。世界に平和を望まない人は一人もいないと思います。すべての人が同じ気持ちになればこの世界は平和になります。

なので、私は今回の事業で学んだことをいろいろな人に伝えていきます。

広島派遣を通して私が出来ること

立田中学校　伊藤　優那

八月六日のあの日、けたたましく響く爆音に、激しい熱風、青い空には髑髏の様なきのこ雲が浮かんだ。八時十五分、広島に原爆が投下された。真っ黒になった広島では、真っ赤な人たちが叫んだ。

「熱いよう。誰か水を。」

皮膚が溶けた真っ赤な人たちは水を求め、原爆ドーム前の川へと次々飛び込んでいったそうだ。

私は戦争時には生まれていない。しかしその話を聞いた後、原爆ドーム前に立つと、いやというほど聞いた話以上の情景を肌で感じた。そして、照り付ける暑さの中、当時の人たちはきっと、もっと熱かったろうに、と考える。私は只々、手を合わせることしかできなかった。また、平和を望むことしかできなかった。二度とこんなことは起こってはならない、起こらせてはならない。

広島平和記念式典では、多くの人たちが並び、一人一人が折鶴を持っていた。何より私の印象に残ったのは、外国人が大勢いたことだった。また、そのことが嬉しかった。式典が始まり、子ども代表の平和への誓いが始まったとき、ああ、この子たちはとても勇敢だなあと思った。私たちよりはるかに小さな子どもたちが、今まさに平和を誓おうとしているではないか。小さい背中は広島の誇りを背負うようなものだった。二度とこんな悲劇を起こしてはいけない、繰り返してはいけない。私はいろいろな気持ちがあふれそうになった。広島市に鳴り響く平和の鐘は、いつまでも私の心の奥で響いていた。

私は本当に広島派遣に参加してよかったと思う。いま日本が平和であるのは、戦争の恐ろしさを後世に伝えようとした人たちがいるからこそ成り立っていると考える。核兵器がなくなれば平和なのではなく、人と人が信頼し合い、分かち合ってこそ、真の平和が生まれるのではないのか。私は、今回の広島派遣で学んだことを次の年代に多く語ることこそ、いま私が出来る最善の事だと思う。

伝える過去と願う未来

八開中学校　　鈴木　仁

平成最後の広島平和記念式典。ぼくは、このことに特別な意味を感じた。ただでさえ今のぼくたちには戦争がどんなものだったか想像もつかない。それに加えて年号がかわってしまう。そう考えるともっと遠いものになってしまう気がした。さらに、被爆から七十三年ということもあって、戦争や空襲、そして原爆のことを伝えられる人も減ってきている。だからこそ、関心をもち、知ろうとすることが大切だと思った。そのために、ぼくはこの非核平和広島派遣事業に参加した。

この事業で感じたことが二つある。まず一つ目は、やはり原爆ドームだ。ねじ曲がった鉄骨や崩れている壁は、まるでぼくたちに原爆の恐ろしさを語りかけてくるような姿で、残っているのが不思議に思えた。

二つ目は、たくさんの外国人がいることに驚いた。中には千羽鶴を持っている人もいた。被爆した日本だけでなく、世界中の人たちが平和を望み、願っていることを改めて感じさせられた。世界にはまだ戦争をしている国がある。そんな国の人たちにも平和の良さを知ってもらいたいと思った。

ぼくが戦争や被爆で一番嫌な事は、罪のない人が巻き込まれてしまうことだ。「嫌だ」と言えないのはとても苦しい。すべては国の為だと言われて命を落とした人たちがいる。そんなことはあってはいけない。これだけは体験していなくてもわかることだ。そんな人たちのために、ぼくたちは常に平和を望み、伝えていかなくてはならないと、この非核平和広島派遣事業を通して強く思った。

世界と平和

八開中学校　　安田　響基

私が見た今の広島は、高いビルが立ち並び、道路には路面電車や多くの人や車が行き来していました。しかし、原子爆弾によって、想像すらできないくらい多くの人々の命が奪われました。家族を失って苦しめられている人たちを生み、歴史と人々に深く傷を刻んだ広島は、今も日本だけでなく世界が深く考えさせられる場所でした。

平和公園は世界の平和を願う場所なのだと思いました。最初に立ち寄った記念館で見た地球平和監視時計は「広島への原爆投下からの日数」と「最後の核実験からの日数」をカウントしていて、世界で核実験が一度でも行われたらカウントがゼロにリセットされています。広島に投下されて二万日を超えているのに、最後の核実験の日数が四桁にすら届いていないことを知り、七十三年を過ぎても核が消えていないことを訴えていると思いました。平和公園に建てられている原爆の子の像は、世界に平和を呼び掛けており、世界を見渡しているという説明を聞きました。平和の灯は非核化と世界平和が実現されたら火が消されると知りました。公園には、まだまだ世界平和と広島の悲劇が二度と起こることのないように、非核化の実現を訴えるものがたくさんありました。

今や核は広島で爆発したものよりもはるかな破壊力を有してしまいました。世界には核が千を超えるほど存在しています。この核が実践に使用され、落し合いに発展したら、相手だけでなく自分たちの大切な人々までも苦しめることになるのに。私にとって核を保有する事は「いつでも戦争できますよ」と宣言しているとしか思えません。相手も大事、自分も大事。人は一人では生きていく事ができないのに、なぜ人を殺める準備をするのだろうか。

繋ぐ、結ぶ、守る。

八開中学校　　佐保　涼莉

今まで、戦争や原爆についてもっと多くの事を知りたいと思っていた。しかし、広島で実際に自分の目でそれを見て、聞いて、もう見たくないと目を逸らしてしまいたくなった。そこにあったのは想像していた以上の残酷な世界。広島へいく前までの感情が一気に覆された。

私は、広島派遣に参加することができて本当に良かったと思っている。ふつうに愛知県で過ごしていたら一生知ることのできなかったかもしれない多くの事を学ぶことにつながったと思うからだ。文字だけで聞き、自分で想像するよりも、その時をくぐり抜けてきたものを見て、それから直接感じ取る方が絶対に得るものが大きいと思ったからだ。広島に残る戦争の痕はすべてが衝撃的だった。それらはみんな戦争の、原爆の悲しさを全身で私たちに伝えようとしている。でも私はそれに対して、じっと見て考え、感じ取ることしかできない。それだけでもつらくて仕方がなかった。被爆者の方はそれを実際に体験して、忘れることもできず抱えながら生きているのだろう。そう考えるとものすごく悲しかった。

平和記念資料館にお母さんの使っていたもののコーナーがあった。突然お母さんを失い、残された子供はどんな気持ちなのだろう。残ったものはお母さんと原爆を思い出してしまうつらいきっかけにだってなりえる。それでもお母さんの形見だから、大切なものだから守り続ける。原爆はそうやって罪のない人から宝物を奪い、多くを奪っていった。もうこんなことはあってほしくないと思うのは、心ある人間なら当然の事だろう。もちろん、私もその一人だ。今ある平和を当たり前だなんて思わないで、とても尊いものだということを忘れたくはない。忘れない。そしてこの世の「これから」へ・・・

未来に繋ぐ

八開中学校　水谷　世蓮

七十三年前の八月六日。いつも通りの一日が始まろうとしていた朝のことだった。青い空から落ちてきた原子爆弾はヒロシマを襲った。辺り全体を青白くし、原子爆弾の真ん中はまぶしいほどの白で、周りは黄色と赤を混ぜたような気味の悪い色の輪ができたそうだ。一瞬の出来事だった。一万二千度という太陽二つ分の熱線と強烈な放射線、それと、音よりも速い爆風。空へと立ち昇っていくキノコ雲の下で、原子爆弾は次々と人々の人生と希望と、それから愛を、一瞬のうちに奪っていった。

原爆ドームを見たときは、もう、本当に、体が動かなくなってしまった。今、自分が立っているこの地で七十三年前、人が倒れていたのだと思うと、苦しかった。被爆者のこんな言葉がある。「あの日、閃光が僕たちを焼いた。熱かった。痛かった。最後にもう一度、母ちゃんに、会いたかった。」大切な家族や友達、すれ違う人、さっきまで生きていた人が、倒れていくことを想像すると鳥肌が立つ。水を求め、皮膚が垂れ下がり、赤い肉をむき出しにして歩き、苦しみながら倒れていく人。人まみれの川。家屋に潰されている人。「熱いよう、痛いよ。」「水をください。水を。」多くの人が苦しみながら死んでいく地獄の世界に変わってしまった。なんとか生き延びた人も痛いし苦しいし、ついには亡くなってしまう人もたくさんいた。そんな状況ならば、死ぬのが自然で、生きているのが不自然だと思うのかもしれない。だから、そんな中で生き延びた人は、きっと辛いのだろうと思う。
今もなお、七十三年前の記憶は、被爆者の心を蝕み続けている。

「平和とは、自然に笑顔になれること。平和とは、人も自分も幸せであること。平和とは、夢や希望をもてる未来があること。」平和への誓いで印象に残った小学生の言葉だ。これから先、戦後百年、百五十年と、この八月六日に起きた出来事を忘れないためにも、原爆について知り、伝承者になることが今の私たちにできることだと思う。今を生きる私たちに託された大事な、大事な使命なのだ。

広島で感じたこと

佐織中学校　佐藤　真瞳

僕は、今回の愛西市の事業で、生まれて初めて広島に行きました。初めて会う他校の中学生のみんなと過ごす二日間は、最初こそ緊張しましたが、色々な話をすることができて良かったです。

二日間、たくさんの場所に行き、たくさんのものを見ることができましたが、中でも平和記念公園の見学が最も印象的でした。そこには、平和記念資料館だけではなく、戦争や原爆に関する数々の石碑やメッセージが残されていました。

また、一日目に訪れた原爆ドームも印象に残る建物でした。初めて見た原爆ドームは、まるでそこだけ時間が止まったような建物に見えました。周りには綺麗な緑や新しい建物が並んでいるにも関わらず、

「ドンッ」

と、そこだけ不気味な雰囲気を放つようでした。

ドーム以外にも、ガイドの方に説明してもらいながら、たくさんの場所を見学させていただきました。初めて知って衝撃的だったことは、この原爆で、多くの中学生も犠牲になっているということです。自分と変わらない年齢の子どもたちが命を落としていることに驚き、だからこそ、今の平和な時代に生きていることを感謝しなければならないと思いました。

戦争を体験した人が少なくなってる今。二度と戦争をしてはいけない、僕たちの後に生まれる子どもたちにあの苦しい生活をさせてはいけない、と、改めて思う二日間となりました。このような貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

平和の灯を消す

佐織中学校　加藤　愛斗

原爆ドームの写真を、教科書で何度が見たことがあります。だから、原爆の恐ろしさについては知っている気持ちでいました。しかし、それは間違いであるということに今回の広島派遣を通して気付くことができました。写真で見る原爆ドームと自分の目で生で見る原爆ドームとは大きな差がありました。僕は、大きな衝撃を受け、何かに圧倒され、当時の様子を想像すると、胸が締め付けられるような、言葉には表すことのできない気持ちになりました。そして、平和のありがたさを改めて感じました。美味しいご飯が食べられること、安心して眠れること、思う存分勉強ができること、これは全て平和だからできることです。この平和に感謝し、これからを生きていきたいです。同時に、みんなにも、平和のありがたさを再認識してほしいとも思いました。

広島平和記念公園には、平和の灯があります。この火は、一九六四年八月一日から今日まで燃え続けており、核廃絶と恒久平和が実現したときに消されます。

『一体、この火はいつ消えるのだろう？』

僕は、この火を見て、そんな疑問を抱きました。広島平和記念公園にはたくさんの千羽鶴がありました。たくさんの人が平和を望んでいることが分かりました。あんなにたくさんの人が平和を望んでいるのに、今もまだ、平和の灯は点いたままです。

あの火を消すために、僕たちは何ができるのでしょうか。僕は、まずは１人１人が平和について知ること、考えることが大切だと思います。今回、広島に行くまで僕が何も分かっていなかったように、分かった気になることなく、戦争や原爆の恐ろしさを見つめることが必要なのです。

最後に、一日でも早く平和の灯が消えることを願います。

戦争の悲惨さ

佐織中学校　森　己乃佳

今年の平和記念式典は、曜日が原爆投下の日と同じでした。だから、私たちを含む参列者にとっては、一層強く平和の願うことのできる一日になったような気がしています。

私が最も印象に残っている場所は、平和記念資料館です。入った直後から外とは空気が異なり、私たちに、原爆のむごさを五感で感じさせてくれるような場所でした。ここには、原爆が投下された町の様子や苦しんでいる人々を写した写真、さらには、被爆した後の衣類や生活用品が展示されています。驚くことに、原爆投下瞬間の映像まで残されているのです。見ていてつらくなるものばかりでしたが、それを見て、感じることが、原爆や戦争の残酷さを知ることにつながるのだと思いました。悲しい気持ちにはなりましたが、それでも、大切な資料を残しておいてくださったことに、感謝したい思いでした。

平和記念資料館の中で、私が最も心に残っているものは、当時中学生だった三人の男の子が被爆時に身に付けていた学生服や帽子、ベルトなどの遺品です。同じ中学生のものということもあり、特に印象深く見入りました。この三人のうちの一人は、原爆投下の翌日、橋の上で死亡しているところを父親に発見されたそうです。おそらく、熱くて熱くて、水を求めて川に行こうと思ったところで力尽きたのでしょう。改めて、当たり前である生活が原爆による一瞬の出来事で崩れたことを知りました。

私は、この二日間を通して、平和の大切さや原爆の恐ろしさを初めて正しく理解したような気持ちでいます。これからは、自分自身が日々の生活を大切に過ごしていくと同時に、今回学んだことを周りの人に伝えていけるようになりたいと思います。

広島を通して平和を見つめ直す

佐織中学校　馬場　南帆

広島は八月六日、被爆から七十三年の「原爆の日」を迎えました。私は今、何の不自由もなく暮らすことができています。欲しいものがあれば、お店に行って買うことができます。のどが乾いたら冷たくて安全な水を飲むことができます。私は今回の広島派遣事業に参加させていただいて、改めて戦争の恐ろしさを知り、改めて平和について考え直さなければならないと思いました。

一日目に行った平和記念資料館では、学校の歴史の教科書で見たことがあるものがたくさん展示されていました。それでも、実際に自分の目で見るのと教科書で見るのとでは、全く異なると思いました。少女の血がべっとり付いたワンピース、午前八時十五分で永遠に止まったままの懐中時計。そういった数々の遺品を見て、胸が苦しくなりました。途中で、こんなにつらく苦しいものを見続けるなんて耐えられないとも思いました。しかし、これらの遺品を残し亡くなった人たち、その死を悲しんだ人たちのことを思うと、戦争を知らない私たちが今できることは、このつらさや苦しさを感じることだと感じました。

私は、広島の本当の姿を見て、感じて、知るということは、これからの平和への未来を考えていくことだと学びました。そして、平和記念式典の子ども代表の言葉にもあったように、平和とは、自然に笑顔になれることだと分かりました。この広島派遣を通して、私たちの身近にある笑顔に感謝し、大切に守っていかなければならないと思いました。

いつか世界中の人たちが笑顔になれるように、まずは自分の周りの人たちを笑顔にできるように、これからもたくさんのことを感じて、考えて、生きていきたいです。

非核平和の世界

佐織西中学校　安達　輝

僕は今年、８月５日と６日に広島派遣事業に参加させていただきました。普段、体験できないような見学や聞けないようなお話など貴重な経験をすることができました。

1945 年８月６日午前８時 15 分、広島に原子爆弾が落とされました。この原爆によって強烈な熱戦や爆風、放射線などが起こり、この日だけでなく、かろうじて生き残った人も後遺症に苦しんだと言われています。そして人々だけでなく爆風によって広島市は爆心地から３km 範囲内の約 90%が破壊、焼失しました。そして朝の８時 15 分ということから、１日の始まりが来て家を出たばかりの人がまさか急に町が火の海になるとは思っていなかったと思うと、とても辛かったと思います。

そして、平和記念公園や資料館を見学して感じたことがありました。１つめは、被爆したアオギリについてです。このアオギリは爆心地から約１km のところの庁舎の中庭で被爆しました。爆心地方向に爆風を遮るものがなかったので熱線と爆風をまともに受けました。枝葉はすべてなくなり枯木同然だったこの木は翌年の春に芽吹き、敗戦の中で混乱状態にあった人々に生きる勇気を与えました。僕もこの木の勇気を与えたことは忘れてはならないと、実際に見て感じることが出来ました。

２つめは、平和の灯です。この平和の灯は昭和 39 年に建てられ、この灯が消える時は核のない平和な世界になった時と言われています。僕はこの灯が１日でも早く安心していけるように祈っています。

３つめは、原爆ドームについてです。原爆ドームは壁などもほとんど吹き飛ばされてしまいました。しかし現在まで、平和な世のため原爆の恐ろしさを無言のまま語り継いでいます。今年で戦後 70 年になります。これを機にたくさんの人に平和について考えてもらえたら嬉しいです。僕は１日でも早く非核平和の世界を見られるよう考えていきたいと思います。

原爆の街を訪れて

佐織西中学校　永石　大和

僕が今回広島に行って一番印象に残っているのは、資料館にあった原子爆弾によって亡くなった方々の遺品です。腕時計や三輪車などがありどれも形が変形したり元がなんだったのか説明がないと分からないものばかりでした。そして、被爆した学生服を見て心がとても痛くなりました。その学生服は、津田栄一さん福岡肇さん上田正之さんの三人が身に着けていた衣服を集めたものでした。彼らは、僕と年があまり変わらない中学生で建物疎開作業現場で被爆しました。その状況を今の自分たちに当てはめるととてもありえないと思いました。今この日本では、戦争が起きてなくてとても平和です。しかし、もしまた原子爆弾が使われたら今自分が暮らしている当たり前の日常が一瞬にして無くなってしまうと思うと僕たちも例外ではないと思いました。次に原爆ドームなどの原子爆弾による被害を受けた建物や身元が分からない人たちが埋められている山を見て、改めて原子爆弾を使ってはいけないと思いました。しかし、今世界には約一万個の核兵器があります。すべて無くすのにはまだ全然遠い道のりかもしれませんが毎年核兵器の数は減ってきています。このまま減らしていけばいつか核なき世界ができるかもしれません。そのためにも、核実験をもう二度と行わないようにしたり新しい核兵器を作るなどといったことをしないようにすることが、平和な世界へと繋がっていくと思います。

今回僕が実際に広島に行って、聞いたこと感じたことを、家族や友人に伝え非核化に少しでも貢献出来たらいいなと思いました。そしてもっと自主的に広島の原爆や長崎の原爆そして、世界にある核のことについて詳しく調べ再び原子爆弾が使われないことを願いたいです。

広島に行って心に残ったこと

佐織西中学校　園　楓乃

私は、広島派遣に行って特に心に残った人がいます。それは、佐々木禎子さんです。

禎子さんは、2 歳の時に被爆し、被爆した後も元気に毎日を過ごしていましたが 12 歳になった時に白血病を発病してしまいました。病院に入院し、お見舞いとして折鶴が贈られたことをきっかけに禎子さんは鶴を折るようになりました。1000 羽の鶴を折れば元気になると信じて毎日折り続けました。折鶴を折るようになって約 1 か月で千羽に到達したはずでしたが禎子さんのお母さんは陰で禎子さんの折った鶴を隠していたそうです。それでも禎子さんは元気になれると思い、毎日鶴を折り続けていましたが発病してから 8 ヶ月後の 1955 年 10 月 25 日に亡くなりました。

禎子さんが亡くなってから禎子さんの同級生は自分達に何か出来ることはないかと考え記念の像を造ることにしました。像を建てるには沢山のお金が必要となり募金活動を行った結果、像建立の運動を始めて約 2 年半で像が完成しました。その像は今でも平和記念公園に建っています。

1945 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分

広島に落とされた原子爆弾。平和記念公園では毎年平和祈念式典が開催されています。それに私は参加させて頂きました。原爆死没者名簿奉納から始まり、8 時 15 分に 1 分間の黙祷をします。約 50 分間の式典ではありましたが 1 つ 1 つの内容が濃い時間でした。

被爆者の平均年齢が 80 歳を超えた今、戦争の悲惨さを自ら学び、未来へと繋げていくことが今、私たちが出来る 1 番のことだと思います。そして、2 度と同じことが起きないようにしていきたいです。

平和の灯が消えるまで

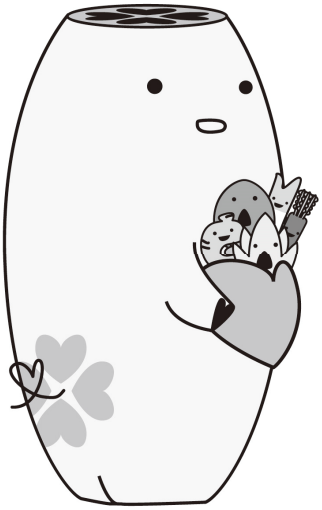
佐織西中学校　桂川　花菜

私は今まで、歴史の授業で教えてもらったことぐらいしか、原爆について知りませんでした。そんな時、広島派遣のカメを見て、実際に行ってみないとわからない、原爆の強さや怖さを知り、核について考え、みんなに伝えたいと思い、参加しました。

１９４５年８月６日午前８時１５分、晴れた空は青く、いつも通りの日々が始まろうとしていた時、たった一発の原子爆弾により、人々の生活が一瞬にして変わってしまいました。亡くなってしまった人、体がケイドロになった人、着物の柄が皮膚に焼きついた人、内臓がとびでている人、目がたれている人、生き延びたけど家族や友達が死んでしまっていた人など、どんな被害があったのかを知ることができました。

平和祈念資料館で被害にあった人の写真や服を見ると、やはり聞いただけではわからな悲惨なものがありました。もし私があの場所にいたら、そんなことを考えさせられました。もし目の前に、とびでた内臓をかかえながら、「水をくれ」と歩く人がいたら、水をもらい、死んでいく人がいたら、悲鳴をあげずにいられたでしょうか。目をそらさずにいられたでしょうか。実際にその光景を見た人の、恐怖、悲しみ、憎しみが消えることはないだろうなと思いました。

被爆した人の中には、私と同じ中学生、幼い子供もいた、と悲しい現実を知り、心が沈んでいくようでした。

なぜそれほど大きな被害をだすほどの「核」が作られてしまったのでしょうか。まだ世界にはたくさんの核があります。平和を目指す今、核は要りません。核廃絶のためにも、多くの人が原爆について知り、考えなければいけないと思いました。

核の解体はとても危険で、核がなくなるのはずっと先かもしれません。それでも、少しでも早く核のない世の中をつくり上げ、その暁には平和の灯が消えることを願います。